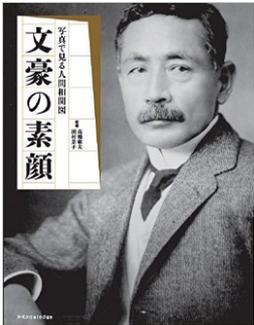
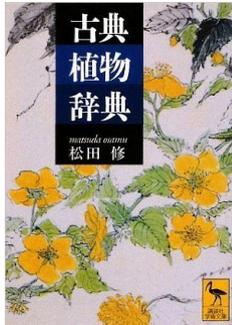
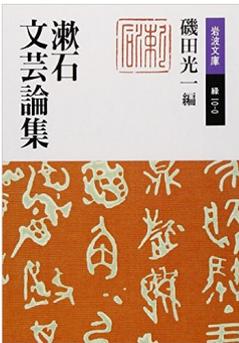
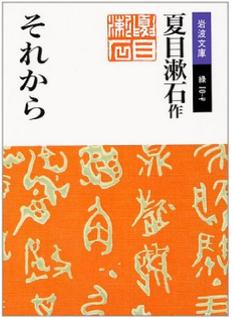
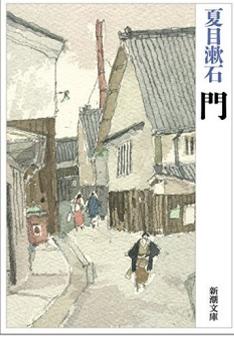
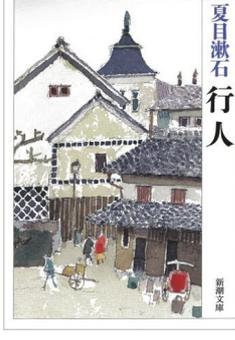
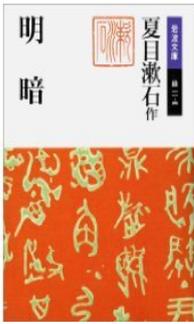
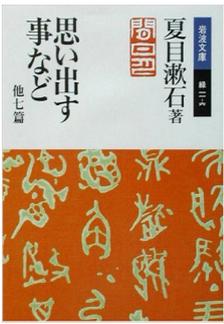


CDIからのご案内 中高等部図書館日本セクション 2017年1月

新春の寿ぎ、謹んでお慶び申し上げます。今年もよろしくお願ひ申し上げます。
 安倍総理夫人（安倍昭恵さん）より寄贈いただいた書籍の登録が、引き続き進められています。新年度を迎え、あらたに貸し出し可能となりました蔵書をお知らせ致します。幅広いジャンルの書籍がございますので、ぜひCDIをご利用ください！

			
<p>写真が見る人間相関図 文豪の素顔 <監修> 高橋敏夫・田村景子</p> <p>写真で見る素顔、自筆（自身が語る）の素顔、評論される素顔。教科書では絶対に習わなかった文豪達の横顔に迫る。</p>	<p>エヴリシング・フロウズ 津村 記久子</p> <p>席替え、クラス替え、受験、引っ越し... 中学三年生の人間関係は、つねに変わり続ける。大阪を舞台に、人生の入り口に立った少年少女の、たゆたい、揺れる心を繊細な筆致で描いた、青春群像小説。</p>	<p>日本近代美術史論 高階秀爾</p> <p>日本美術の「近代」は西欧絵画との魂を揺さぶる出会いから始まった。洋画を拓いた由一、清輝。日本画の芳崖、大観、春草。近代美術の伝統と革新のせめぎ合いの諸相を、本書は先駆者たちの内面に分け入り追究する。</p>	<p>古典植物辞典 松田修</p> <p>日本人は、古来「花」に心を寄せながら暮らしを共にしてきた。『古事記』『風土記』『万葉集』などにどんなな植物が登場するかを精査し、検証を加える。</p>
			
<p>平安の配彩美 かさねの色目 長崎 盛輝</p> <p>十二単など平安時代の装束に見られる配色260余種類を確かな考証により再現した名著。王朝文化に見られる伝統色の数々とトン分類一覧表を完備。</p>	<p>漱石文芸論集 磯田 光一</p> <p>漱石の文芸論。小説を書く際のスタイル、芸術家や作家に必須な心構え、漱石の愛読書や文芸団などを論じた内容。</p>	<p>吾輩は猫である 夏目 漱石</p> <p>中学教師苦沙弥（くしゃみ）先生の書齋に集まる明治の俗物紳士たちの語る珍談・小事件の数々を、先生の家で迷いこんで飼われている猫の目から諷刺的に描いた、漱石最初の長編小説。</p>	<p>草枕 夏目 漱石</p> <p>山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ、情に棹させば流される。一美しい春の情景が美しい那美さんをめぐって展開され、非人情の世界より帰るのを忘れさせる。</p>

			
<p style="text-align: center;">坊ちゃん 夏目 漱石</p> <p>漱石の作中もっとも広く読まれている“坊ちゃん”。無鉄砲でやたら喧嘩早い坊ちゃんが赤シャツ・猫の一派を相手に繰り広げられる痛快な物語。坊ちゃんのまっすぐな行動は、誰の心にも爽やかな「青春」を思い出させてくれる一冊。</p>	<p style="text-align: center;">虞美人草 夏目 漱石</p> <p>愛されることをのみ要求して愛することを知らず、我執と虚栄にむしばまれ心おごる麗人藤尾の、ついに一切を失って、自ら滅びゆくという悲劇的な姿が描かれた、厳粛かつ理想主義精神を強調した長編小説。</p>	<p style="text-align: center;">三四郎 夏目 漱石</p> <p>大学入学のために九州から上京した三四郎は、東京の新しい空気の中で世界と人生について一つ一つ経験を重ねながら成長してゆく。『それから』、『門』と続く前期三部作の第一篇にあたる。</p>	<p style="text-align: center;">それから 夏目 漱石</p> <p>定職に就かず、毎月1回、本家にもらいに行く金で裕福な生活を送る長井代助が、友人平岡常次郎の妻である三千代とともに生きる決意をするまでを描く。</p>
			
<p style="text-align: center;">門 夏目 漱石</p> <p>「誠の愛」ゆえに社会の片隅に押しやられた宗助と妻のお米は、罪の重荷にひしがれながらひっそりと生きている。宗助は、「心の実質」が太くなるものを求めて、禅寺の門をくぐるのだが… 新潮文庫・岩波文庫作品有り。</p>	<p style="text-align: center;">彼岸過迄 夏目 漱石</p> <p>いくつかの短篇を連ねることで一篇の長篇を構成するという漱石年来の方法を具体化した作品。中心をなすのは須永と千代子の物語だが、ライバルの高木に対する須永の嫉妬の情念を漱石は比類ない深さにまで掘り下げることに成功している。</p>	<p style="text-align: center;">行人 夏目 漱石</p> <p>学問だけを生きがいとしている一郎は、妻に理解されない上、両親や親族からも敬遠されている。孤独に苦しみながらも、我を捨てることができない一郎。「他の心」を掴めないでいる人間の寂寞とした姿を追究して『こころ』につながる作品。 新潮文庫・岩波文庫作品有り。</p>	<p style="text-align: center;">こころ 夏目 漱石</p> <p>恋人を得るために親友を裏切り、自殺へと追いこんだ。その過去の罪悪感に苦しみ、自らもまた死を選ぶ「先生」…。愛と偽善、誠実の意味を追究した傑作。</p>

			
<p style="text-align: center;">硝子戸の中 夏目 漱石</p> <p>持病の胃潰瘍に悩みつつ次々と名作を世に送りだしていた漱石が、終日書齋の硝子戸の中に坐し、頭の動くまま気分の変るまま、静かに人生と社会を語った随想集。著者の哲学と人格が深く織りこまれている。</p>	<p style="text-align: center;">道草 夏目 漱石</p> <p>夏目漱石の長編小説。「朝日新聞」に、1915年6月3日から9月14日まで掲載された。「吾輩は猫である」執筆時の生活をもとにした漱石自身の自伝であるとされる。主人公の健三は漱石、金をせびりに来る島田は漱石の養父である塩原昌之助であるという。</p>	<p style="text-align: center;">明暗 夏目 漱石</p> <p>「朝日新聞」に1916年5月26日から同年12月14日まで連載され、作者病没のため188回までで未完となった。円満とはいえない夫婦関係を軸に、人間の利己を追った近世小説。漱石の小説中最長の作品である。</p>	<p style="text-align: center;">思い出すことなど 他七編 夏目 漱石</p> <p>1910年の盛夏、漱石は保養先の修善寺で胃潰瘍の悪化から血を吐いて人事不省に陥った。辛くも生還しえた喜びをかみしめつつこの大患前後の体験と思索を記録したのが表題作である。他に、二葉亭や子規との交友記など七篇。</p>